

音楽ホール「市民に身近に」

仙台市長選(8月3日投開票)

で、市が青葉区青葉山に整備する音楽ホールと東日本大震災メモリアル拠点の複合施設[■]が主要な論点の一つになっている。市の目玉事業はどんな特徴があり、今後どのように進められるのか。設計を担当する建築家藤本壮介氏(53)が河北新報の取材に応じ、「市民との距離が近い施設にしたい」と強調。音響効果の低下が懸念される大ホールの可動壁については、計画見直しの可能性に言及した。

設計担当 建築家・藤本壮介氏に聞く



ふじもと・そうすけ 東大卒。2000年藤本壮介建築設計事務所設立。14年フランス・モンペリエ国際設計競技最優秀賞受賞。25年大阪・関西万博の会場デザインプロデューサーに就任。代表作にフランスの集合住宅「ラルブル・プラン」、関西万博の「大屋根リング」など。宮城県石巻市の市複合文化施設「マルホンまきあーとテラス」の設計も手がけた。北海道出身。



複合施設の外觀イメージ

■ 音楽ホールと東日本大震災メモリアル拠点の複合施設 予定地は仙台市地下鉄東西線国際センター駅北側に開館目標時期は2031年度。市は24年9月、基本設計の委託先を藤本壮介建築設計事務所(東京)に選定した。メインの音楽ホールは2100席規模で、コンサート、合唱コンクール、オペラ、舞台演劇の4パターンに対応できる可変型を採用。建物は地上4階、地下1階で、延べ床面積3万1388平方メートル。整備費の概算額は現時点で約350億円。本年度一般会計予算に基本設計費など計約7億4800万円を計上。

ー現在、基本設計を進めている。

「『音楽ホール』『メモリアル拠点』という、言葉の響きも相まって近寄り難い印象を持たれがちだ。とにかく市民との距離が近い施設にしたい」

「コンサートがない日も芸術や災害文化(災害を克服できる社会の文化)に関する多様な市民活動が共生し、家族連れが『あそこ』で何かやっているから行ってみよう』と気軽に足を運びたくなるイメージだ」

ー放射状に配した長方形の床材

は「ひらひら」した独特な形状。屋根やバルコニー、テラスにもなる。

「大きなハコがドーンと建っていると威圧感が生じ、近寄り難さを助長してしまう。開放感を大事にしたい。ひらひらした特徴的な形が市民の記憶に残り、皆で存在を共有できる」

ー内部の特徴は。

「さまざまな動きがあらゆる場所から見える設計を検討している。発表会、遊ぶ子ども、創作活動…。多様な人がばらばらに活

動しているけど、それぞれを許容し、共存できる場。そこから豊かなつながりが生まれるかもしれない」

ー大ホールの可動壁について、藤本氏の提案では音質が低下するとの懸念が出ている。

「震災後、仙台フィルハーモニー管弦楽団などが音楽による心の復興をけん引した。ホーム(本拠点)として利用する仙台フィルの意見を大切にしながら検討を進めている。見直しに可能性を開いている」

「音響性能を世界レベルにするのが大前提。必ず担保する。世界の事例をいろいろ調べているが、『こうでやっているから、採用』とはしない」

ー建物の整備は概算で350億円。建設費高騰でさらに膨らむ可能性がある。

「市と丁寧な話を進めている。(建設費を下げる)魔法の方策はなく、(必要な仕様について)話し合いを重ねることが一番だと思っている」

(土屋聡史)

